

なぜ日本語の「気管支炎」から 中国語の“支気管炎”へ変わったのか

陳力衛

要旨 日本語の「気管支」は「気管」から枝分かれした形状になっているため、明治以来「気管枝」という表記も長らく使われてきたが、戦後になってようやく「気管支」に一本化された。一方、中国語にはもともと「気管支」という概念がなく、20世紀初頭、日本語から「気管支」や「気管支炎」が医学用語として伝わってきた。しかし、ほどなくして、日本語の「気管支炎」から「支」による連体修飾構造の“支気管炎”に変わっていった。その理由として、対義語の「本一末」「支一幹」をもちながらも、ペアとなる語の生産性が発達してこなかった中国語に対して、逆に日本語で形成された「本一支」の対義的造語（「本社一支社」「本店一支店」など）の逆輸入により、「支」の連体修飾による区分的意味が中国語で強められた結果ではないかと思われる。

キーワード 和製漢語 語順変化 非謂形容詞 対義語

日语「気管支炎」是如何变为汉语“支气管炎”的？

提要 19世纪的汉语医学名词是按“总→大→小”来区别表示气管的粗细的，其中“大气管”表示我们现在的“支气管”。到了20世纪，最初引进日语概念时是完全按照日语形态“气管支”来用的。日语的“气管支”是指“气管的枝”，意味着是由“气管”分支而成的。但因为中文原本就喜欢用偏正结构的定语修饰名词，如“总→大→小”，加上日语新传入中文的“本社一支社，本店一支店”的普及，针对“气管”，“支气管”的“支”则作为区别词的构词词素，更容易为中文接受。这与近代对义概念所生产出非谓形容词的新词是一脉相承的。

关键词 和制汉语 词序 非谓形容词 对义词

はじめに

中国南京在住の日本人研究者N先生から下記のような質問メールが届いた。南京は空気が悪くて「気管支炎」になっています。ところで、中国では“支気管炎”というのですね。語順からすると、日本語はOV「気管を支える」、中国語はVO“支 気管”で良いとは思いますが、「気管支」そのものはラテン語の *bronchus* からの翻訳語と思われます。もし和製漢語を中国語に入れたとしたら語順を変えることもあるのですか。それとも、日本と中国独自で翻訳したのですか。それとも、中国にもともと「気管支」という語があったのですか。

この矢継ぎ早に出された質問を箇条書きに整理すると、

- (1) 日本語と中国語の語順がなぜ異なってきたか
- (2) 「支」は動詞だったか
- (3) 「気管支」は和製漢語か
- (4) 中国ではむかし *bronchus* がどう表現されたのか

といったような、いくつかの問題が含まれている。本稿はそれに答える形で日本語と中国語との交渉史を念頭に置きながらこの語順変化の原因に迫る。

1. 日本語の「気管」と「気管支」

1.1 「気管支」は「気管」の枝だった

『ブリタニカ国際大百科事典』(2011)の解説によれば、

【気管支】*bronchus* 気管は喉頭に続いて始まり、食道の前を垂直に下がり、第4～6胸椎の高さで左右に分れて気管支となる。左右の主気管支はさらに細気管支に分れ、肺胞に連なる。

とある。樹形図のように、幹となる気管の左右から枝分かれしたのが「気管支」であった(図1)。「気管」がメインで、その枝となるのは「気管支(枝)」である。つまり、語構成からみれば、「気管を支える」のではなく、「気管の枝」であろう。したがって、日本語では、

なぜ日本語の「気管支炎」から中国語の“支気管炎”へ変わったのか

気管⇒気管支⇒細気管支⇒終末細気管支
とるように、「気管」から独立した「気管支」
が新しい語形となって、樹形の細分化を「細」
や「終末細」で言い表している。

そこで、あらためて『日本国語大辞典』（第
二版）でその初出を確認すると、「気管」は下
記の2点の資料を挙げている。

『解体新書』（1774）三「気管、為岐而入于肺」

『医語類聚』（1872）〈奥山虎章〉「Trachea, 気管」

いずれも医学関係書で、特に前者の書物はオランダ語から漢文に訳された
最初の近代医学書であり、その記述から推測すると、「気管」は枝分かれし
て肺に至るというのだから、「気管支」を含めた概念を表しているようにも
とれる。言い換えれば、この書物は両者を区別していないのである。後者の
医学専門用語辞書では、英語 Trachea としているので現代では単純に上記の
図1のように枝分かれする前までの気管部分を指している。

一方、「気管支」の初出について、同辞典では洋学者司馬凌海の書いた
『七新薬』（1862）の下記の例を挙げている。

*外用として動もすれば之を霧気となし、肺癆・慢性気管支焮衝及び気管
支の粘液漏に嚙入せしむる者あり。（上巻十七）

しかし、図2で確認できるように、同書の同じ巻に表記の異なる「気管
枝」の例もある。

*沃顔の霧気を用ふれハ、目・鼻及び呼吸器を刺戟し、咳嗽若くハ気管枝
焮衝を起すに至る。（上巻三）

つまり同じ巻に出ていることからわかるとおり、最初から「気管支」と
「気管枝」とは特に区別されていなかったのである。

また、慶応2年の『医療新書』巻一（坪井芳洲訳述、1866）の最後には
「喉頭粘液膜焮衝及気管急性焮衝」という一節があり、巻二の冒頭で「病体
解剖」として「偽膜……喉頭気管ニ填塞シ或ハ大気管枝ニ連及シ或ハ第二等
第三等ノ気管枝極ニ瀰満ス」の症状を挙げ、「大気管枝」と「第二等第三等

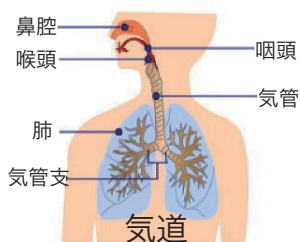


図1

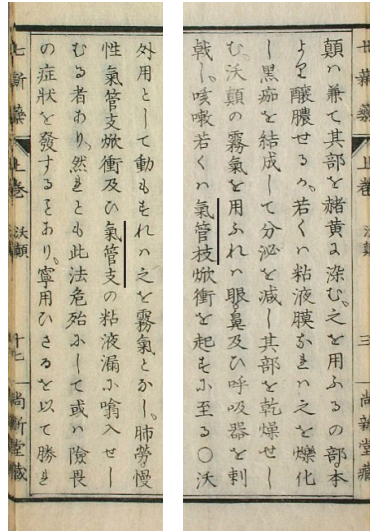


図2 『七新集』における「气管支」と「气管枝」の混用（傍線引用者）

「气管枝」のように、大きさによって「气管」の次に「大气管枝」、さらに第二等第三等で「气管枝」へと細分されている。ここでの漢字表記はいずれも「枝」である。

さらに前に挙げた明治5年(1872)の『医語類聚』では、

Bronchi	气管枝
Bronchia	同上
Bronchiectasis	气管枝膨大
Bronchitis	气管炎

とあり、ここでも「气管枝」のほうが優勢である。ちなみに、「Bronchitis, 气管炎」という対訳がここに成立しているが、それより前の『医療新書』の時には、「气管枝焮衝」「咽喉焮衝」の用法が多く見られた。しかし、後には「气管枝炎」と訳されているところからみれば、この時点の「Bronchitis, 气管炎」という対訳は『解体新書』以来の名残で「气管炎」が「气管支炎」を指す言い方であろう。

1.2 漢方にはない訳名（和製漢語だった）

その「気管支」が中国語由来の表現かそれとも日本で作られた和製漢語かを見分けるために、明治15年の『漢洋病名対照録』（今村亮編、自適堂落合蔵版、1882）は恰好の資料となりうるであろう。そこには、「気管枝病」として表1のように「気管枝加多児」「気管枝喘息」「気管枝出血」の3種類を挙げており、最初の病名の別名として「加答児性気管枝炎」も見られる。

当時の東京大学医学部の講師今村亮が作ったこの和漢洋対照表では、漢名として挙げた「喘息」「咳血」などがいずれも漢方に出てくるのに対して、洋名に対する訳名としての「気管枝加多児」「気管枝喘息」「気管枝咳血」3語はその時代の新語であった。したがって、後述するように、「気管」は中国語由来であったが、「気管+枝」は日本での新たな創出による和製漢語と言えよう。

表1 『漢洋病名対照録』（1882）

漢名	和名	洋名	訳名	略解
麻黄湯金沸草散等之症	徒ニ咳 <small>がいけ</small> 氣ト称ス	Bronchitis catarrhalis	気管枝加多児 又気管枝粘膜葛答爾、気管枝粘膜加多児性炎、加答児性気管枝炎	此病ハ即チ気管枝粘膜ノ加多児ニノ急性慢性ノ二症アリ而シテ慢性症ハ通常累久ニノ数月或ハ数年ニ彌ル者少ナカラス
喘息 又喘急、喘、喘気病、喘促、痰喘	たんもち又ぜんそく、ぜりつく <small>せむ</small> 病	Asthma bronchiale	気管枝喘息 又喘息（医方研幾）、喘息、気管枝痙攣、気管枝痙、気管枝喘、喘（遠西方彙）、喘病（合信氏）	此病ハ気管枝及ヒ気胞ノ筋纖維ニ痙攣ヲ起ス迷走神経ノ疾患ナリ而シテ之ヲ類別セハ独瘵、傍瘵、胃弱及ヒ燥痰性の喘息是ナリ
咳血	咳につれて痰血い出るト称スル者ハ多ク之ヲ指斥ス	Haemorrhagia bronchica (Bronchorrhagia)	気管枝出血	此病ハ気管枝ノ血管破綻シ出血スル者ニシテ其血液ヲ咯出スルカ故ニ一ニ之ヲ咯血 (Hæmoptysis) 血 (Hæmoptysis) ト称ス

2. 「気管支」と「気管枝」との拮抗

2.1 辞書記述における表記のゆれ

近代になって初めての国語辞書『言海』(1889-91)では、「気管」だけを収録し、下記のような語釈をしている。

きくわん (名) 気管 動物ノ^{イキ}気ヲ通スル^{ツグ}管、鼻、口ヨリ喉ノ中ヲ下リ、胸ノ内ニテ兩ニ分レ、左右ノ肺ニ入ル。

これを見ると、前述した『解体新書』の記述と似ていて、「気管」という概念をもって「気管支」をも含めて表していることがわかる。

一方、それを批判する山田美妙の『日本大辞書』(1892-93)は「気管」を収録するだけでなく、「気管枝」をも漢語として収録している。


きくわん 名。{(気管)} 漢語。喉ニアル呼吸ノ管。肺ノ上部カラ喉ノ後ロマデノトナヘ。

きくわん・し 名。{(気管枝)} 漢語。気管ノエダ。気管ハ喉頭ガ一本デ、其端ハ左右ノ肺臓ヘ各一本ツツ分カレル所カラ枝ヲ打ツトノ形容デイフ語。

きくわんし・かたる 名。{…加答爾} 気管枝ノ粘膜ニ熱ノカラムコト。病気ノ一種。

ここでは、はっきりと「気管」と「気管支」を区別させ、それぞれの表す部位まで限定し、とくに後者を「気管ノエダ」としているように、『言海』よりも厳密にそれぞれの意味解釈をしている。しかし、前述したように、「気管枝」は和製漢語と見做することができるが、山田美妙の辞書では本来和製漢語は{…加答爾}のような記号をもって区別されるべきところを、{(気管)}を漢語と認識したことに引きずられて、{(気管枝)}までも漢語として類別している。

時代がすこし下って、『日本大辞典ことばの泉』(落合直文、1898)では、「枝」から「支」へと変わっている。

きくわん-し  気管支。気管より左右の肺臓へ各一本づつ分れ入る、その枝。

きくわんし・かたる 〔図〕。気管支加答兒。病の名。…気管支に、かたるを起し、発熱、悪寒、交交来りて…。

ここでも正確に「気管支」を定義し、最後に「その枝」とあるように、語の形成上の由来を明確にしている。編者の「緒言」には、「又田口幸太郎君、久保猪之吉君は、その専門の学科に関する語を、全く、担当せられ、大に助力せられたり」といった記述があり、専門用語を重視する態度が見られる。その久保猪之吉は1900年に東京帝国大学医科大学を卒業、日本の耳鼻咽喉科学の先駆者として知られる人物だから、おそらく彼は当該辞典の医学語彙を担当していたのであろう。加えて、落合直文の死後、明治41年に森林太郎（鷗外）の書いた「序」によれば、

術語辞書のくさぐさを作ることの、極て緊要なるべきをば、予、落合ぬしと、しばしば語りかはししことありて、落合ぬしも、これ等特殊の目的ある辞書を、普通の辞書に併せ編まむことの、望ましき業ならぬを諾ひ給へりしに

と、術語の重要性を強調していることから、この辞書の専門用語も専門家の手によるものが多かったと考えられる。

その後の国語辞書、たとえば、『辞林』（1907）、『大日本国語辞典』（1915-18）、『広辞林』（1925）、『辞苑』（1935）、『大言海』（1937）などでは一貫して「気管支」を見出し語として統一してきた。

国語辞書における表記は「気管支」のほうへと定着していくように見えたが、対訳辞書ではやはり「気管支」と「気管枝」の表記がまちまちだった。

明治19年の『袖珍医学辞彙』（伊地知英太郎、新宮涼園編、伊藤誠之堂、1886）でも図3のように、「気管枝」を含めた多くの造語がある一方、

BRO . (4	
Bronchial artery,	気管支動脈
" cell,	氣胞
Bronchiectasis,	気管支膨大又 氣管擴張
Bronchiocatarrhus,	氣管加答兒
Bronchiole,	氣管細管
Bronchiopneumonia,	氣管枝及肺質 炎
Bronchiorrhoea,	氣管粘液瀉
Bronchiostenosis,	氣管枝變狹
Bronchitis,	氣管支炎
" capillaris,	毛細氣管枝炎
" catarrhalis,	加答兒性氣管 枝炎
" cratuposa,	格管布性氣管 枝炎
" putrida,	腐敗性下斜筋
Bronchocele,	甲状腺腫大
Bronchobæmorrhagia,	氣管枝出 血
Bronchophonia,	氣管枝器響又 氣管枝聲
Bronchophonismus,	全上
Bronchoplasty,	氣管穿孔ヲ閉 鎖スル術
Bronchorrhagia,	氣管枝出血
Bronchorrhœa,	氣管粘液瀉
Bronchotomy,	全上截開術
Bronchus,	氣管枝
" sinister,	左氣管枝
Brook lime,	水菖菖
Broom tops,	金雀花
Brown mixture,	複方甘草合劑
Bruit,	聽胸器或ハ打 胸器ニテ探聽

図3 「支」と「枝」の混在

最初の「気管支動脈」「気管支膨大」「気管支炎」など、「気管支」も混在していることから、一般の対訳辞典はむしろ現状をそのまま容認していたようである。

たとえば、明治25年(1892)の『雙解英和大辞典』(島田豊纂訳、共益商社書店)にも気管の図とともに、「気管枝」「気管枝炎」などが見られる(図4)。

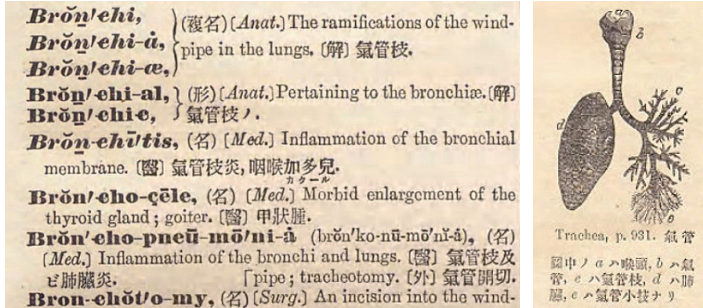


図4 『雙解英和大辞典』(1892)

20世紀に入ると、『井上英和大辞典』(1917)では、

Bronchitis n. 気管支炎

のように「気管支」だったが、『スタンダード和英大辞典』(竹原常太、1924)では、

Kikan (気管) n. 《解》The Trachea; the windpipe. bronchia;

★気管支 a bronchus, -気管支炎 bronchitis. -気管枝加答児 Bronchial catarrh.

のように、同じ見出し語「気管支」の下位語に「気管枝」が見られる。それを踏襲したように、『斉藤和英辞典』(日英社、1931)でも、同じく、

Kikanshi (気管支) 【名】The bronchia; the bronchus,

・気管支炎 Bronchitis. ・気管枝加答児 Bronchial catarrh.

とあり、同一見出し語内でも「気管支」と「気管枝」が見られるなど表記が定まっていない。

このように、辞書でさえ「気管支」と「気管枝」との混用が見られることから、普通の文章レベルでは一体どこまで混用が続いたかを、具体的にデー

データベースによって確認しておく必要がある。

2.2 新聞、雑誌、書籍に見られる表記の推移

国会図書館の書籍タイトル及び目次から検索できる近代デジタルライブラリーを調べてみると、表2のように、明治・大正・昭和前期にわたって、登場回数としては「気管枝」のほうが優勢である。

さらに具体的に年代別にみれば、1899年までは両者は完全に拮抗しているようである。たとえば、次頁表3のように同じ年の出版物から両者の例を抽出してみると、「気管支」と「気管枝」がそれぞれ使われているのがわかる。さらに1879年の同じ書物の中に両表記の語が同居していることも確認できる。

そこで、さらに明治元年(1868)から1945年までの雑誌における両者の分布を調べてみると、上記の書籍と似た傾向が見られる(図5)。

表2 「気管支」と「気管枝」の登場回数の推移

年代	気管支	気管枝
1870-1879	7	2
1880-1889	14	13
1890-1899	12	20
1900-1909	8	31
1910-1919	33	56
1920-1929	21	19
1930-1939	11	27
1940-1949	3	4
合計	109	172

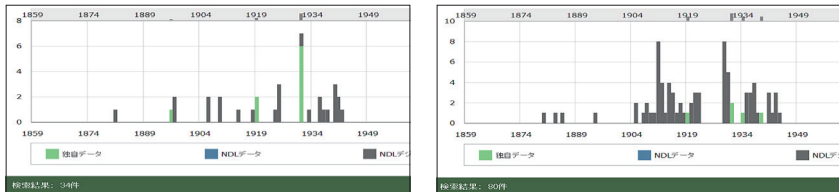


図5 雑誌における「気管支」(左)と「気管枝」(右)

検索結果は「気管支」34件と「気管枝」80件のように、「気管枝」のほうが優勢である。しかし、同データの1945年以降をみると、完全に「気管支」が優勢となり、4715件もあるのに対して、「気管枝」はわずかに下記の3件しかなかった。

- * 気管枝腺由来と推定される肺癌の1例 牛島宥1975年12月、癌の臨床、21(15)

表3 明治期前半の「気管支」と「気管枝」の例

気管支		気管枝	
急性病類集、巻之4 ニーマイル著、岩佐純編訳 (告成堂、1876)	義膜性気管支炎 毛細気管支炎	小児科(斯泰涅爾)、5 スタイナー著、長谷川泰訳 (島村利助、1876)	気管枝及肺之疾 病、一 気管枝 加答児
医学七科問答、内科学 律度羅(リュドロー)著、内 務省衛生局訳(東京医学会 社、1879)	気管支炎 慢性気管支炎	医学七科問答、解剖学 律度羅(リュドロー)著、内 務省衛生局訳(東京医学会 社、1879)	気管気管枝及諸 腺
理学的打聴診論、2 ニーマイル著、桜井郁二郎訳 (島村利助、1880)	気管支吸機音	内科提綱、1 悉密篤原撰、佐々木東洋補 訳(瑞穂屋卯三郎[ほか]、 1880)	気管及気管枝病 類、第一 気管 枝加答児及気管 枝焔衝 気管枝喘
内科摘要抄語解、巻1 江馬元齡述、尾崎謙二等記 (岡安慶介、1880)	気管支炎部	内科提綱、2 悉密篤原撰、佐々木東洋補 訳(瑞穂屋卯三郎[ほか]、 1880)	第六 気管枝出 血
内科概要、4 謨亜納屈(モアナック)著、 高松凌雲訳(島村利助、1883)	第三 気管支病	医通 伊勢錠五郎編、樫村清徳関 (伊勢錠五郎等、1883)、2版	第一節 咽頭及 気管枝病 第二節 気管枝 及気管炎
診断図説 関蹊著、田沢敬与校補、原田 豊園(関環[ほか]、1885)	第二十八 格魯 布性気管支炎	家畜病理書 村崎常治編訳(博聞本社、 1885)	気管及ヒ気管枝 炎
病床治験録：明治医家 手塚義三郎著(手塚義三郎、 1885)	毛細気管支炎ニ 比魯加爾頻寒天 法ノ効験	小児病各論、前 瀬川昌者編訳(瀬川昌春、 1885)	戊 気管枝諸病
医療捷徑 鳥谷部政人著(内科新論出版 事務所、1886)	気管支炎	小児科(斯泰涅爾)、上 スタイナー著、長谷川泰訳 (済生学会、1886)	(戊) 気管枝及 肺之病
内科新論、4 抜爾蘇朗(ロバート・バルソ ロウ)著、鳥谷部政人訳(内科 新論出版事務所、1887)、5版	気管支加多児 (急性気管支炎 毛様気管支炎) 慢性気管支炎 格魯布性気管支 炎	小児病各論、前 瀬川昌者編訳(英蘭堂、 1887)、2版	戊 気管枝諸病
鶏病治方 村上要信著(山本良助、1888)	気管支炎	病家必携、上編 瀬川昌者(養和堂主人)著 (瀬川昌者、1888)	第十二章 喉頭 及び気管枝の 病、喉頭及び 気管枝の造構 及び機能、喉 頭及び気管枝 の撰義法
黴毒全書 ヘルマン・アイヒホルスト著、 江坂素三郎訳(若林茂一郎、 1889)	気管及気管支黴 毒	民間治療法 松本順口授、高松保郎筆記 (愛生館、1889)、訂正再版	気管枝病

なぜ日本語の「気管支炎」から中国語の“支気管炎”へ変わったのか

*ジステンパー感染犬にみられた真菌性気管枝炎〔英文〕 大島寛一、内藤善久、清宮幸男 1979年 2月、日本獣医学雑誌、41(1)

*スunksの肺の気管枝構成と血管分布 宮木孝昌、坂井建雄 2001年、形態科学、4(2)

したがって、書籍・雑誌の場合はほぼ同じ傾向を見せていて、明治の拮抗期を経て、大正以降は「気管枝」の優勢が続いたのち、1945年以降は完全に「気管支」に逆転されるようになったといえる。

一方、新聞は上記の書籍・雑誌とはまったく異なる様子を見せている。明治の早い時期から明らかに「気管支」への傾斜が見られる。たとえば表4で示したように、『朝日新聞』では、圧倒的に「気管支」が使われ、「気管枝」の数は微々たるものであった。

表4 朝日新聞における「気管支」の優勢

年代	気管支	気管枝
1879-1926	501	4
1927-1945	50	4
1946-1989	86	0

1926年までに「気管枝」は4例あり、うち3例は広告である。

* 1906年 8月 6日 (広告) 呼吸器病医院 耳鼻咽喉気管枝科

* 1910年 12月 5日 (広告) 尾滝城南堂薬局清気散 生気強肺劑 気管枝、肺肋膜、百日咳の主薬

* 1925年 2月 14日 (広告) 独逸バイエル社 肺結核気管枝炎治療劑グアヤコーゼ

1927～1945年の4例のうち、下記に2例を挙げる。

* 1934年 2月 15日 首相静養 気管枝カタルで

* 1936年 4月 25日 「愛のさめぬ間に」訓導の新妻縊死 気管枝炎を悲観し

『読売新聞』もまったく同じで、1874～1989年に「気管支」は869件もあるのに対して、「気管枝」はヒットしなかった。しかし、個々の例をあたってみると、1926年12月20日までの「気管支」121例のうち、少なくとも5、6例には「気管枝」が混ざっていることがわかる。

なぜ新聞は図書・雑誌と違い、「気管支」の表記を中心にしたのかを考えると、図書・雑誌の執筆は個人の表現をそのまま反映させたのに対して、新

聞社内には従来、表記の規則を独自に立てて統一させる傾向があったのではないかと思う。それは前節で取り上げた国語辞典の一貫した表記「気管支」を基準にした結果かもしれない。

2.3 「気管炎」から「気管支炎」へ

「炎症」を意味する「焮衝」は、文久元年(1861)に刊行された『眼科真筌』(謬布涅爾(Ludwig Buchner, 1824-1899)著、江馬聖欽正人訳)にも「眼球焮衝」「劇甚焮衝」「極劇焮衝」などと多用されていて、前出の『医療新書』(1866)にも「気管枝焮衝」「咽喉焮衝」をもって「気管支炎」を表す用法が多く見られる。明治期の英和辞書でも Bronchitis に対して、「気管焮衝」と訳しているが(たとえば明治21年(1888)の『和訳字彙』三省堂、炎症を表す語はほかに音訳の「加多兒」「加答兒」「葛答爾」もあり、これらの語彙は意識の「焮衝」とともに、20世紀に日本語からの借用語として中国へも伝わり、後者の「焮衝」が『王雲五大辞典』(商務印書館、1930)にも採録された¹⁾。

1.1で見たように、明治5年(1872)の『医語類聚』では、「Bronchitis, 気管炎」の対訳で「気管支炎」をカバーしている。

もし「気管支炎」一語に絞ってみれば、『日本国語大辞典』が初出として挙げているのは『毎日新聞』1890年5月の例であるが、さきの『袖珍医学辞彙』(1886)はもちろんのこと、それよりさらに古く、下記の資料のように1875年まで遡ることができよう。

* 内科摘要(華氏) 卷之1 ヘンリー・ハルツホールン著、桑田衡平訳、島村鼎閔(島村利助、1875) 気管支炎

上記表3の例をみても、最初から「気管支炎」のほうが多いが、「気管枝炎」(1885)も「気管炎」(1883)も見られる。つまり日本語では徐々に「気管炎」から「気管支炎」のほうへシフトし、より厳密に用語の使用を始めた。その結果、後述するように日本語から消えた「気管炎」が逆に中国語として使い続けられることになったといえよう。

1) 陳(2014)を参照。

3. 中国語における表現

3.1 「気管」は「気管支」の概念をカバーしている

「気管」は中国出自の漢語で、明の『水滸伝』で、すでに次のように使われていた。

*一者護那疼痛、二者傷着他那氣管。那大虫退不够五七步、只听得響一声、如倒半壁山、登時間死在岩下。(中)

近代に入ると、宣教師のベンジャミン・ホプソンによる『全体新論』（合信、1851）が中国語で書かれた近代医学の最初の解剖学書として知られている。その呼吸系の説明には「肺経」という一節があって、図6の右頁のように、左上は「肺経気管図」で、幹となる気管の部分も枝分かれの部分も一律に同じ「気管」と呼び、ただ、左右をもって区別していた。右上の「肺中三管図」をみると、下にある文字を右から左へ「赤血支気管」と一瞬読んでしまいそうになった。つまり、「支気管」という語が最初から中国語固有の表現だったという結論になりかねなかったが、本文と図のタイトルを読むと、その三管とは「赤血支・気管・紫血支」（現代ではそれぞれ肺動脈、気管、肺静脈）を指すことがわかった。つまり、「支」をもって管を指す場合もあり、「気管」と並んで「肺中三管図」と称する所以である。その意味で日本語の「気管支」の「支」（枝の意）とは異なっていた。その原文の中国語を下記に引用しておこう。

分岐為二、名曰気管、左管約二寸許、斜入左肺裡窩之上、右管略闊而短約一寸許、横入右肺之裏、由是管分小管、漸分漸多、愈多愈微、密行兩肺之内、形如氣喉、節節有環。以微鏡顯之、見每管之末、皆有一圓薄氣胞、大小氣管、另有兩支相附而行。一為紫血支、一為赤血支、行至管末、散佈網支纏罩氣胞之上……

要するに、「気管」から「左右管」に分かれ、さらに「小管」となるように、「大小気管」と表現されている。言い換えれば、「気管」は「気管支」を含めた言い方であり、本来原書では区別されたところを、中国語では大小を



図6 『全体新論』(合信、1851)

もって表現しているだけである²⁾。

『全体新論』の著者合信は後に『内科新説』(1858)も著している。同書でも、「気管」「気管支」を「総気管」と「小管」で言い分けている。

同氏には、さらに『医学英華字釋』(*A Medical Vocabulary in English and Chinese*, Shanghai Mission Press, 1858)という医学用語の対訳語彙集がある。その25頁から英語と対訳した関係記述を抜粋する。

On these cells ramify the minute blood-vessels.	気胞上微管分佈
The smaller air tubes unite, and make larger ones.	衆微管合為大氣管
Each lung sends out one larger air tube.	左右肺各出大氣管
These unite and form the trachea.	兩大氣管合為總氣管

2) 松本秀士・坂井建雄 (2009)。

なぜ日本語の「気管支炎」から中国語の“支気管炎”へ変わったのか

現代の用語にすると、「微管」は細気管支、「大気管」は気管支、「総気管」は気管に相当する。つまり19世紀の中国では、

総気管⇒大気管⇒(小管)微管

の順に「総・大・小・微」など形容詞による連体修飾をもって「気管」「気管支」「細気管支」を表している。

3.2 「気管炎」の確立

一方、合信の同対訳語彙集の34頁では、病名として、

Bronchitis, acute and chronic 気管新舊炎

Wind-pipe, disease of 大気管病

を挙げて、Bronchitisを「気管炎」ではなく、「気管新舊炎」と訳している。もしかしたら単に「炎」は「炎」の間違いかもしれない。なぜなら、同書の37頁には、さまざまな「炎」のつく語を掲載していて、

脳～、肺～、舌～、生水核～、喉～、胃～、大小腸～、肝～、内腎～、膀胱～、子宮～

のように、炎症表現がかなりそろっているからである。

ここで、19世紀の英華字典の流れをもう一度確認してみると、ロブシャイド『英華字典』(1866-69)では、「気管」という言い方が下記の訳語に見られる。

Bronchiae, Bronchia, Bronchi the ramifications of the trachea in the lungs 気管、喉管

Bronchial belonging to the bronchiae 気管的、気管嘸

Bronchitis an inflammation of some part of the bronchial membrane 喉管火、気管火

Bronchus the windpipe 気管、喉管、喉嚨

このように Bronchitis を「気管火」と訳している。むろん、井上哲次郎『訂増英華字典』(1884)でもそれが受け継がれている。後の専門語彙集となるドリットル(盧公明)『英華萃林韻』(1872)では下記のように合信の『医学英華字釋』(1858)からそっくり写して、Bronchitis は「気管新舊炎」のま

まとなっている。

acute and chronic Bronchitis 気管新舊炎

Wind-pipe or throat 咽喉、硬喉、気管

a disease of the Wind-pipe 大気管病

一方、中国人の編集した『華英字典集成』(鄭其照、1899)では、Names of Diseases として初めて Bronchitis を「気管炎」と訳している。

Larynx 喉嚨、気管

Organs and Materials of the body Trachea or windpipe 気管

Names of Diseases Bronchitis 気管炎

その前の初版(1868)、再版(1875)ではこの病名を挙げておらず、前述したように、日本では明治5年(1872)の『医語類聚』にはすでにその対訳が見られたことから、日本語の影響を受けていた可能性も否定できないだろう。

20世紀に入ると、宣教師の狄考文(C. W. Mateer)による専門語彙集 *Technical Terms English and Chinese* (1904, 序1902)に、

Bronchitis 気管痰、風寒咳嗽、肺氣脂炎

とあるように、「気管痰」「肺氣脂炎」の訳が出てくる。あるいは、『商務書館英華新字典』(1913)には、

Larynx 喉管、気管

Bronchitis (醫) 気管発炎

Bronchus (體) 気管、喉管

Laryngitis 喉管熱、気管発炎

のように、「気管発炎」の訳が現れるが、基本的に「Bronchitis 気管炎」の訳が中国語として定着するようになる。つまり、日本では早くに正確な表現「気管支炎」を定着させたのに対して、中国では「Bronchitis 気管炎」のほうが続いて用いられていたといえる。

4. 日本語訳語の導入

4.1 「気管枝」の登場

20世紀の英華辞典は日本の英和辞書を参照するようになることが知られている³⁾。顔惠慶『英華大辞典』(1908)では日本の英和辞書の影響を受けながらも、下記のように、Bronchitisを「喉管火、気管鬱熱」と訳す一方、他のItis.の語釈のところでは、「如“bronchitis,” 気管發炎是也」と「気管發炎」という表現を用いている。そして、明らかに日本由来の「気管枝」も見え始めるのが特徴であろう。

Bronchitis Inflammation in the bronchiæ 喉管火、気管鬱熱

Bronchial, Bronchic Belonging to the bronchiæ 気管枝的

Bronchia, Bronchiæ, Bronchi. The ramifications of the windpipe, which carry air into the lungs 气脂、気管枝、喉管、吸気入肺之管

Itis. A termination to the Greek name of the organ or part affected by inflammation, as, bronchitis, inflammation of the bronchia 希臘名物字之字尾(加於體內機關名字之後以表發炎之意、如“bronchitis,” 気管發炎是也)

その後の対訳辞書でも同じく日本語からの訳語を取り入れることになる。たとえば、『英華合解辞彙』(1915)には以下のようにある。

Bronchitis [医] 喉管炎、気管枝炎

Bronchus 気管枝(尤以指気管之二総管時為多)

ここでわざわざ「気管枝」のことを括弧内で説明し、中国語の「気管の二総管」を指すことを明らかにしている。さらに1916年の『官話』をみると以下のようになっている。

Bronchitis (新) 気管炎、(新) 肺気管炎 Croupous of fibrinous~ (新) 気管成膜炎

Bronchus (部定) 気管枝

Bronchia 気管(脂)

3) 陳力衛(2012)。

Bronchial catarrh (新) 気管泗炎
Bronchiectasis 気管(膈)脹
Bronchorrhagia (新) 気管出血
Bronchorrhoea (新) 気管痰過多
Croupous or fibrinous bronchitis (新) 気管成膜炎
Tracheitis (新) 気管(膈)炎
Tracheo-bronchitis (新) 気膈兼気管(膈)枝炎

ここにきて「Bronchitis (新) 気管炎」「Bronchus (部定) 気管枝」の対訳が見られる。新語としての認定(新)と教育部認定(部定)の印を付しているところから、日本からの新概念として確実に取り入れようとしていることがうかがえる。そして最後の「Tracheo-bronchitis (新) 気膈兼気管(膈)枝炎」のように何とかして「気管支炎」を言い表そうとしていることがわかる。

英語との対訳辞典のほかに、医学語彙はドイツ語由来が多いとされていることから、対訳辞書『徳華大字典』(1920)を見てみると、

Bronchial [解] 気管枝的
Bronchien [解] 気管枝
Bronchitis [医] 気管枝炎

とあり、完全に「気管枝」「気管枝炎」を取り入れている。それはこの辞書の凡例にも記されているように、日本で当時出版されていた6冊の独和辞書を参照したことと関係しているのであろう。

辞書だけでなく当時の雑誌論文ではどうとらえているかを見てみると、やはり日本語からの「気管枝」が多く使われていた。

- * 幼児気管枝加答兒及肺炎之療法 瀬川昌世《東亜医学》1922年(第1卷第5期)
- * 気管枝喘息症之原因及療法 蔣有孚《同德医学》1922年(第5卷第1期)
- * 家庭医学常識(十)慢性気管枝炎 余愚《国聞周報》1925年(第2卷第31期)
- * 医業雑識:内科叢録:気管枝喘息之季節的変動(附図表)(待続) Ernst

なぜ日本語の「気管支炎」から中国語の“支気管炎”へ変わったのか

Wiechman Herman Paal 《医薬学》1927年（第4巻第1期）

*抄録：気管枝喘息与 Ephetonin Neustadt 《同仁会医学雑誌》1928年（第1巻第4期）

この中には「気管枝加答兒」「気管枝喘息」もあれば、「気管枝炎」も使われている。つまり、日本語から入ってきた「気管支」が中国語としても使われていたのである。

4.2 語順を変える——「気管枝」を「枝気管」へ

1920年代の半ばから中国の雑誌論文に日本語の順序とは逆の「支気管」または「枝気管」のような表現が現れてくる。たとえば、

*余之刪燕呈菁録：支気管拡張症之治法 阮其煜 《広济医刊》1925年（第2巻第6期）

*枝気管拡張症之病理及治療 [中英文対照] 勃勞寒 吳匡 《同济医学月刊》1927年（第2巻第6期）

*喘息及其類似證慢性支気管炎肺氣腫之治法 姜白鷗 《医報》1933年（第1巻第6期）

*流行病須知：風温、肺炎、支気管炎（待続）陸淵雷 《医報》1934年（第2巻第2期）

とある。それと呼応するように、対訳辞書でも、たとえば『英漢模範字典』（1929）のように、

bronchial a. 枝気管的

— bronchial catarrh 気管支炎 — bronchial asthma 気管支喘息

bronchitis n. 枝気管炎

と、「枝気管炎」と「気管支炎」の両者が同時に使われているのが見られる。医学専門辞書の『高氏医学辞彙』（第十版、1930）に至っては、

Bronchitis 枝気管炎

と、「枝気管炎」を訳語として確立させている⁴⁾。ここから連体修飾語の「枝(支)気管」に統一されていくのだが、同時代の中国語辞書『王雲五大辞典』(1930)ではまだ、日本語由来の形を保ったままの「気管支」を見出し語として採録している。

【気管支】[生理] 由気管端分出的小気管。

事実、下記の例のように、広告などにその言い方がまだ存在している。

1932年九江指南／中華藥房廣告／康健目錄／第四章小兒科藥類

小兒咳嗽藥	小兒患傷風咳嗽氣管支炎乾喘頓咳等各種肺經之病亟宜速治遲則恐有痰迷驚風之危惟藥多酸苦小兒畏服此藥味甜性和能疏風祛寒保肺止咳	每盒四角試服一角
-------	--	----------

その後の他の辞書を見てみると、『辞源』の初版本(1915)には収録されていないが、『辞源』正統合訂本(1932)では、

【支気管】的生理學名詞。亦名枝気管、由気管下端分出之小気管、左右各一、入於肺臟。

と、「支気管」または「枝気管」の表記を可としており、日本語と異なる語順の連体修飾となっている。さらに双璧の『辞海』(1936)でも、

【支気管炎】(Bronchitis) 病名、有急性慢性二種。……

【支気管喘息】(Asthma bronchials) 病名、因氣候激變、迷走神經感受刺激、支気管筋或横隔膜發生痙攣也。

と、完全に「支気管」へと確定されている。

そうになると、中国語において日本語から入ってきた「気管支(枝)」から「支(枝)気管」へと語順を変えさせた理由が何であるかを、言語学的に説明する必要があるのであろう。

4) 張大慶(2001) http://sourcedb.cas.cn/sourcedb_scr_cas/zwqkk/kxwhzl/kxjss/jxdkjs/200912/P020091229395740546296.pdf を参照。

5. 「支」の意味変遷と区分的役割

5.1 日中両国語における「支」の働き

古来、「支」は「枝」と相通ずるものだ。『説文解字』では「支、去竹之枝也。従手持半竹。」とあり、近代の林義光『文源』には「即枝之古文、別生條也。」のように、「支」は「枝」の古字と明確に見なされている。また「支」は「肢」の古字ともされている。

たしかに、平安末期の漢和辞書『類聚名義抄』僧中五二には、

「支 上(字音) 枝 サラ ハカル エタ ヒトシ」

とあり、「支」と「枝」とが同じ意味関係にあることが記されている。

そこであらためて日本語における「気管支」と「気管枝」の混用を整理していくと、近代漢訳洋書として日本に影響を及ぼしている『全体新論』(1851)に、同じ細長い「管」を意味する「紫血支」「赤血支」が登場していることが重要な意味をもってくる。この書物は日本において、安政4年(1857)に翻刻され、明治7年(1874)に石黒厚による和訳『全体新論訳解』が出版されていた。つまり、「支」をもって細長いものを表すことも不思議ではない。日本語の「気管支」の誕生はそうした背景があったことも忘れてはならない。上記のように「支」と「枝」が相通ずることから、「気管枝」も通用する。

ただし、日本語において「支」をもって具体的な物の「管」または「枝」のようなものを意味する言葉は「気管支」の一語しかなく、ほかには「区分枝(肢)、選言枝(肢)、選択肢」のように抽象的な意味をもつ語があるだけである。つまり、「気管支」の「支」は名詞的な実質的な意味(えだ)をもつもので、「肢」のようにやや接辞に近づくものにはなっていないのである。事実、

日本語：気管⇒気管支⇒細気管支

のように、「気管支」が完全に「気管」から独立した語になり、またその語の前に修飾語の「細」を冠することができ、さらに下位分類の「細気管支」または「毛細気管支」まで次から次へと細分化されている。

一方の中国語は、少なくとも近代の『全体新書』においては、

中国語：総気管⇒大気管⇒(小管)微管

のように、あくまで「気管」を軸となる語と見做し、形状の大小を「総・大・小・微」という形容詞によって連体修飾をしている。

20世紀になって日本語の「気管支」が入ってくると、しばらくは「気管」と区別された概念として使われていたが、どうしても中国語従来連体修飾のほうに引きずられていくため、この「気管支」の「支」が、「本」の「気管」に対する「支」の「気管」と理解されるようになり、修飾語を前にシフトした結果、いまの中国語では、

気管⇒支気管⇒細支気管

のように、結局同じように「気管」を中心とした樹形図的表現が成り立ってきたわけである。ただし、『趙氏英漢医学辞典』（中華書局、1951）によれば、

bronchia 分枝気管（大於細枝気管、但比較枝気管小）

とあるように、細分化すると、「枝気管⇒分枝気管⇒細枝気管」の順に「分枝気管」が間に挟まれることもありうる。

その理由を考えると、中国語では「支葉、支幹、支条、支軍、支兵、支派、支胤、支末」のように、伝統的に、主要なもの、本筋なものから枝分かれたもの、いわば「本」に対する「支」の表現が発達してきた。したがって、「本」のほうはもともと既知のものだから言うまでもないものとして存在していて、特に強調して言う必要はないが、「支」となるものは逆に言葉として発達してきた感がある。加えて近代ではさらに日本語から入ってきた「支店、支部、支流、支社」に刺激されて、中国語の「支」はそこへ合流していく力に突き動かされ、「気管支」を「支気管」へと変えていったわけだと考えられる。

つまり、同じ「支」であっても、日本語のほうは枝の意味に留まっているだけで、接尾辞までにはいたらなかったが、中国語のほうは従来連体修飾の役割に引っ張られる形で接頭辞的な意味をもつようになったわけである。

5.2 対義語としての「本」と「支」

近代語の特徴として、「高低」「新旧」「大小」といった対義的なペアになるもの、あるいは「大型、中型、小型」「高等、中等、下等」のような区分的役割の概念が要請されてくる（表5）。中国語としていわゆる「区別詞」「非謂形容詞」という一類の成立である。

表5 ペアになる表現

日本語		中国語	
本部—支部 ⁵⁾		北大—北大分校	支委会
本線—支線		蘭州軍区—陝西軍分区	
本隊—支隊		総廠—分廠	
本流・主流—支流		幹渠—支渠	
本庁—支庁	幹部	幹線—支線	支脈

前述のように、中国語は本来片方だけでも成り立つもので、とくにペアを要求するまでにはいたらなかったが、日本語は逆に「本—支」によるペアの造語がほとんど必要事項とされたため両方がそろえられてきた。それだけでなく、「大中小」「上中下」「高中低」などの三分による連体修飾造語の特徴として、自己完結度の高い意味範疇を独自に形成できて、物事への認識の度合いを深め、概念の細分化にも適するようになる。ゆえにその枠組みにはめ込むための造語が同時になされるようになるため、近代和製漢語として注目されるとともに、中国語に入ってくる余地もあったわけである⁶⁾。

歴史的に考えれば、本来中国語にあった「本—末」と「幹—支」のペアが

5) かつて日本では漢民族の18省をメインの中国とし、結局「中国本部」という言い方で呼んでいたが、そうすると、「本部」に要請されるペアとなる「支部」とはどの部分を指すか、という理解のもとに、蒙古満州を含め、ほかの地域への中国支配の法的位置づけを弱めようとする思惑が見え隠れした時期があった。それはむろん中国の伝統的天下観と衝突することになった。

6) 陳力衛（2001）第5章。

それぞれ対義語としてあったが、上記のように近代になって逆に日本語からの「本一支」のほうが発達してくると、「本」の対義は「末」のほかに、「支」も用いられるようになった。日本語の「本線一支線」が中国語に入ると、「幹線一支線」に変わるのはやはり伝統的な対義概念に嵌められていくからである。さらに「主幹道、次幹道、支幹道」のように、三分区の際の最下位に使われるなど、「支」の区分的な意味も備えてきた。よって、本来幹線なるものの対になる「支」が上記のようにさらに「主・次・支」によってランク分けにも用いられ、ペアとなる対義構造から三分構造にも使われ始めたわけである。

中国語では連体修飾の「支気管」に変えさせたのは、やはり「支」のランク付けの意味合い、つまり接辞としての働きが徐々に強まった結果ではないかと思う。また、前述のように中国では本来「気管炎」をもって「支気管炎」をカバーしていたが、後者の独立をもって専門領域ではより正確に概念区分ができるようになったはずだが、現代では一般的な慣習として「気管炎」だけで通用しているのではないかと思われる。

おわりに

和製漢語として中国に入った語形が中国的な要因によって形態変化を引き起こす例は、正字体から簡体字体への字形の変化によるものが多く、語順を変えた例は二字漢語のようなものが多かった。たとえば、日本語の「限界」「素因」は中国語に借用された際、それぞれ“界限”“因素”へと変えられた。しかし、それは音韻上の理由によるものが多く、文法上の理由によるものは、中国語自身の変化として「情熱→熱情」のように形容詞による連体修飾が名詞の前にシフトされたものである。その意味では、「気管支炎」から“支気管炎”へと変化したのと似ているが、三文字以上の漢字語の語順変化はやはり非常に珍しいものである。

なぜ日本語の「気管支炎」から中国語の“支気管炎”へ変わったのか

付記：本稿は平成28年度成城大学特別研究助成による研究成果の一部である。

参考文献

陳力衛（2001）『和製漢語の形成とその展開』汲古書院

陳力衛（2012）「英華辞典と英和辞典との相互影響—20世紀以降の英和辞書による中国語への語彙浸透を中心に—」『JunCture』第3号，名古屋大学大学院文学研究科附属日本近現代文化研究センター

陳力衛（2014）「近代中国語辞書の苦悩—波寄せてくる日本新語にいかに対処すべきか—」『還流する東アジアの近代新語訳語』関西大学アジア文化研究センター

※中国語版は <http://www.doc88.com/p-5955854826467.html>（2015）を参照。

松本秀士・坂井建雄（2009）「『全体新論』に掲載される解剖図の出典について」『日本医学雑誌』第55巻第4号

張大慶（2001）「高似蘭——医学名詞翻訳標準化的推動者」『中国科技史料』第22巻第4期

陳力衛 Chen Liwei 成城大学経済学部教授 専門：日中対照言語学、日中言語交渉史、日本語史